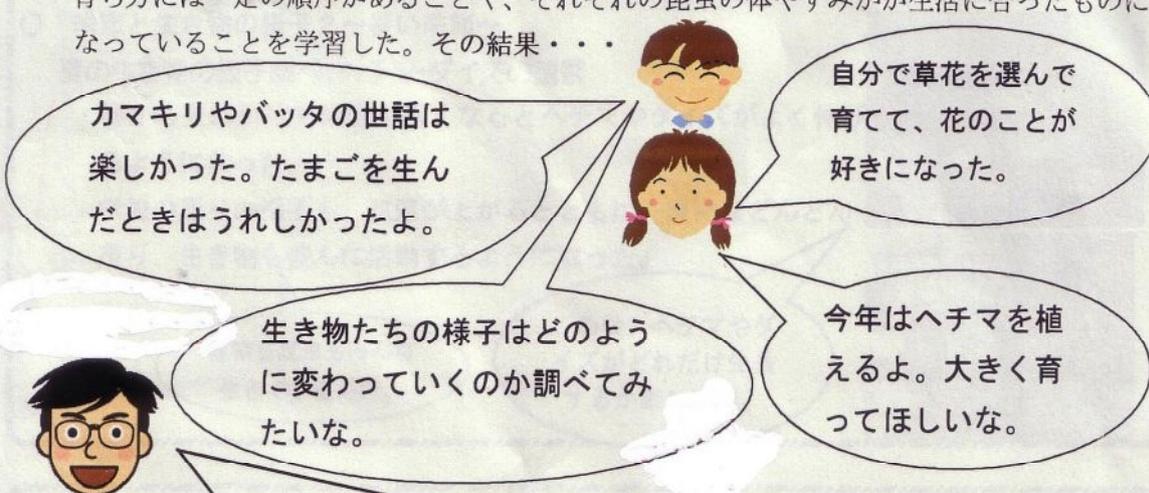


1 身の周りの自然から生きることのすばらしさを感じる子供を目指して

(1) 児童の実態と教師の願い

子供たちは3年生のとき、一年草の種まきから花が実をつけるまでの栽培活動や観察を通して、植物の育ち方に一定の変化があることや、植物の体は主に根、茎、葉からできていることを学習した。また、校庭の回りの昆虫や小動物を飼育することを通して、昆虫の育ち方には一定の順序があることや、それぞれの昆虫の体やすみかが生活に合ったものになっていることを学習した。その結果・・・



カマキリやバッタの世話は楽しかった。たまごを生んだときはうれしかったよ。

自分で草花を選んで育てて、花のことが好きになった。

生き物たちの様子はどのように変わっていくのか調べてみたいな。

今年はヘチマを植えるよ。大きく育ててほしいな。

自然の生き物の生きる姿を感じ取ってほしい。
たくましく生きる生き物、いのちのすばらしさを感じてほしい！

(2) 理科を切り口とした道徳教育

本単元は、身近に見られる動物の活動や植物の成長を季節と関係づけながら調べ、見出した問題を興味・関心をもって追究する活動を通して、動物の活動や植物の成長と環境とのかかわりについての見方や考え方を育てることをねらいとしている。「理科」という教科としてのねらいに沿って学習を進めることは絶対のものである。しかし、理科教育の真のねらいは、「人づくり」であると考え。これは理科に限らず、あらゆる教育活動の根幹ではなかるうか。

植物は日々変化し、葉の数や大きさは日を追うごとに変化していく。また、天候などの違いにより、様子も違う。昆虫や鳥などの生物もまたしかりである。学校の周りの植物や昆虫の様子を観察し、繰り返し身の周りの自然とかかわることにより、我々人間と同様、自然界の生き物も一つの命をもって生きていることを実感させたいのである。季節と成長の様子を関係を意識することに加え、動植物に愛着をもち、「生命をつないで精一杯生きている動植物の営みに感動する」という、「理科」ならではの「人づくり」ができると考えた。

「教科としてのねらい」とともに、「生命尊重」「自然愛護」という道徳教育の観点から見たねらいを奥底に秘め、学習を展開したいと考えた。